

# 全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

## ■第2章「1号機爆発」

13

3月12日午後3時36分、陸上自衛隊第6特科連隊(郡山市)の消防車は、福島第一原発2、3号機四側の坂を下っていた。構内にたまった海水で1号機原子炉を冷却するため、海側の「逆洗弁ピット」という立坑に向かっていた。

消防車には陸自隊員5人と、前列ベンチシートの左側に東京電力の自衛消防隊長小川広幸(50)が案内役として乗っていた。左前方に2号機さらにその左に1号機原子炉建屋が見えていた。

その瞬間、周囲の音が消えた。地面の砂ほり音が、ひゅーと左へ流れた後、転がっていたかれぎが

## 自衛隊消防車を直撃



1号機建屋爆発に遭遇した陸上自衛隊郡山駐屯地の消防車内。車両の放射線量が高く、福島第一原発構内で保管されている1号機

# 鉄骨飛び窓突き破る

命を持ったように浮き上がった。目の前の風景がゆがんだ。「まるで

小川は、長き一瞬ほどの鉄骨が自己を自がけて飛んでくるのを見た。

鉄骨は助手席の窓を突き破り、とっさに出した左腕を直撃した。全てが

スローモーションで起きているように

運転していた佐藤勇一(陸士長22)

は消防車を襲った衝撃に驚いて、急ブレーキをかけた。辺りは煙で何も

見えない。いったい、何が起きたの

「やばい、逃げろ」「車出せっ！」

全面でスグ越しに叫んだのは前列

中央にいた佐藤智2等陸曹(44)だっ

た。もちろん隣の佐藤勇一には聞き

そいたが、アレキペダルに乗せ

た右足も、クランプペダルを踏んだ

左足も、かたかたと震えて動かせな

い。助手席では小川が腕を押しさえ

めき声を上げていた。左腕が委な方

は明かだ。白い防護服にみるみる

を続けるなければならない。もう一

度、行ってください」

またあの現場に行くのか。隊員

にも明らかに不安と困惑が表れてい

た。 「仕方ねえだろ。俺たちぼこれな

んだから」

佐藤智はそう言っ、迷彩服の胸

の辺りをつまんでみせた。

い。アセルを踏むことしか考えな

かった。

同通信 篠原雄也)